



入谷小校長室だより 顔晴れ！入谷っ子！

2019年10月1日

No. 7

TEL 46-2655

FAX 46-2654

学校教育目標：夢に向かって、主体的に学び、心豊かでたくましく生きる児童の育成

目指す児童像：《一かしこくー 一たくましくー 一やさしくー》

☆いつもまなぼうとする子 ☆りりしくたくましい子 ☆やさしくたすけあう子

心も体も元気な子どもを育成するために 家族みんなではやね・はやおき・あさごはんを実践しよう!!

文責：校長 高橋 有

— 実りの秋に向けて・・・ —

《～10月朝会の校長講話内容（予定）より～（要点のみ抜粋）》



「継続は力なり」—努力をすることの大切さとその価値—

10月は、学芸会、持久走大会。11月は、町小・中音楽祭と大きな行事があります。それぞれの行事に向けて、めあてをもって取り組んでほしいと思います。

また、日常生活において、めあてをもって過ごすことはとても大切なことです。

そこで、覚えておいてほしいのが、「**継続は力なり**」という言葉とその意味です。意味は2つあります。

1つ目の意味は、「めあてを達成するためには、続けることが大切である」ということです。めあてを決めただけでは、それは希望であり、目標です。希望をかなえ、目標を達成するためには、努力の積み重ねが必要です。努力というものは、自分でめあてを意識していないとなかなかできるものではありません。めあてを達成させるためには、「**欠かさず、休まず続けましょう**」という意味です。

ここに1枚の紙があります。この紙の厚みが分かる人はいますか？手を離すと、ひらひらとしながら落ちていくこの紙の厚みです。さあ、どれくらいでしょうか？薄すぎて、少し分かりにくいですね。

努力というものも、1回や2回では、この紙の厚みのようなものです。しかし、500回続けたらどんなことが起きるのでしょうか？それをこの紙で観察してみましょう。ここに紙を500枚用意しました。これなら500枚分の厚さが分かるでしょう。薄い紙でも500枚集まると測れる厚さになりますね。努力も同じことです。

2つ目の意味は、「努力を続けることそのものにも価値がある」ということです。自分のめあてや目標を決めても、それが自分の生活に反映されない人は少なくありません。決めたことを実現しようと努力することそれ自体にも素晴らしい価値があるのです。「継続」とは、3日や5日のことではありません。目標が達成できるまでのことです。最初の目標が達成された後も、さらに新しい目標を決めて努力を続ける場合もあります。

そのよい例が、大リーグで活躍したイチロー選手です。イチロー選手は、小学校の時から「いつかは大リーグでプレーしたい」と夢をもち、希望を持って努力を欠かさず続けたといえます。今年、引退しましたが、さらに新しい目標を決めて努力を続けようとしています。イチロー選手は、こんなことを言っています。

「**努力を続けられるということそれ自体が才能です**」と。

全くそのとおりだと思います。皆さんも、継続することで「**努力という才能**」を身に付けてください。そして、努力を継続できる人間になってほしいと思います。

努力を継続し、自分の可能性を広げ、実り多い秋を目指していきましょう！



《9月の職員会議で教職員に提示したことばです！》

9月 

のことば・・・



『真剣に叱る、真剣に叱られるということは・・・』

《松下電気器具製作所（現パナソニック）創業者：松下幸之助》

（1894年～1989年）

松下幸之助さんは、尋常小学校を4年生で中退し、9歳で丁稚奉公に出されました。今では信じられないことですが、昔はこのようなケースがありました。その後松下さんは転職を重ね、18歳で関西商工学校夜間部予科に入学し、専門的な勉強を積み、24歳で松下電気器具製作所を創業し、その後苦労を重ねながら、パナソニックという日本を代表する企業にまで育てあげました。松下さんは苦労を重ねるなかで、人としての生き方を学び、その経験のなかから「真剣に叱られる」という考え方を導き出しました。

松下さんは、叱られるより叱られないほうを好むのは人情だが、「人情と人情とがからみ合って、ママアのウヤムヤにすぎ、叱りもしなければ叱られもしないということになったらどうなるか。神様ならいざ知らず、お互いに人間である。知らず知らずのうちに、ものの見方、考え方が甘くなりその弱さと、もろさが生まれてくることになる」と語っています。

そして松下さんはさらに、「私情にかられてのそれはいけないけれども、ものの道理（人としての生き方）について真剣に叱る、また真剣に叱られるということは人情を越えた人間としての一つの大事なつとめではあるまいか。叱られてこそ人間の真の値打ちが出てくるのである。叱り、叱られることにも、お互いに真剣でありたい」と続けています。

【提示したことばから・・・】

私もこれまで多くの場面で叱られてきました。また、教員として児童を叱ってきました。叱るときは、その児童に人としての考え方や生き方を本当に分かってもらいたいと願いをもって、真剣に児童と向き合ってきました。これまでの叱る・叱られる場面を振り返ってみると、この松下さんの言葉の意味が心に響いてきます。

学校生活では、叱る・叱られる場面が多くあり、それは自分を成長させるための貴重な機会であることを、日頃から児童に理解させることで、指導を効果的に進める環境を整えることにつながります。

先生方も、愛情を込めて、真剣に叱ることの意義を改めて考える機会にしてほしいと思います。

保護者の皆様も、家庭生活の中で、意識してみてください。



